



Title	民族エリートと国民国家建設からみた中央アジア地域研究
Author(s)	熊倉, 潤; KUMAKURA, Jun
Citation	日本中央アジア学会報, 16, 54-55
Issue Date	2020-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.16.54
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88509
Type	journal article
File Information	JB016_014kumakura.pdf



民族エリートと国民国家建設からみた中央アジア地域研究

熊倉 潤

中央アジアを旧ソ連中央アジア地域にとどまらず、中国新疆ウイグル自治区にかけての一带と考えてみたい。こうしてみると、中央アジアは東西に分割されたうえで、ソ連と中国に組み込まれたことが明らかであろう。この広い中央アジアの地域研究を民族エリートの形成、国民国家建設の観点から考察するのが本報告の課題である。言うまでもなく、こうした点での中央アジア地域研究には、中央アジア内におけるソ連側と中国側の比較、あるいは中央アジアと他地域との比較などの可能性が広く開かれている。報告者の近刊書『民族自決と民族団結：ソ連と中国の民族エリート』も、そうした認識のもとに、ソ連カザフ共和国と中国新疆ウイグル自治区の政治エリート集団を、従来注目されていなかった時期を含めて通時的に比較した。もっとも、理論とのつながりや、比較対象を多くとるラージNの比較は今後の課題である。社会科学としての中ソ比較も、これまで研究がさほど多くあるわけではない。中国が加わると、それだけで関数の次数が増えて議論が泥沼化すると言えれば言い過ぎであろうか。

一般に、民族エリートへ着目する手法として、植民地帝国のコラボレータ論、ベネディクト・アンダーソンによる政治エリートの「巡礼」、国民国家の「想像」の議論などがある。植民地帝国のコラボレータ論に関しては、「植民地帝国」とは言いにくいソ連・中国の、「コラボレータ」という表現が似つかわしくない党官僚をも議論に含められるのだろうか。ソ連もその初期には現地の「協力者」がいたが、その後、政権が養成した従属性の高い官僚に置き換えられるとすれば、この「協力者」から官僚へ置き換えられていくメカニズムには、一定の比較可能性、普遍性があると言えるかもしれない。「泥沼化」の危険を冒して中国に目を転ずれば、中国共産党にはソ連共産党と違い「統一戦線部」があり、毛沢東自ら少数民族に対して党への協力（合作）を呼びかけた経緯がある。つまり中国の少数民族エリートには「協力者」という名称が比較的しっくりくるところがある。新疆ウイグル自治区の場合、少数民族エリートの第1世代にはソ連国籍、ソ連共産党籍の者もあり、中国に「協力」することを選択した人もいよう。ついでに言えば、中国への「協力」をやめ、中国を見限ってソ連に亡

命した人もいる。そこに「協力」をめぐる葛藤があったことは確かである。植民地帝国の「協力者」とは趣がやや異なるが、この一群の「協力者」もコラボレータ論に含めて比較の議論を行うことは有意義だろう。もちろん、少数民族エリートの第2世代以降は、中国に「協力」しない選択肢はない。ここに、制度的に養成された従属性の強い党官僚が登場する。この点に着目すれば、政策執行者が「協力者」から官僚へ置き換えられていくメカニズムを比較するというポイントに立ち返ることになる。

次に、先に挙げた手法の2点目のベネディクト・アンダーソンによる政治エリートの「巡礼」、国民国家の「想像」の議論について、紙幅の許す限り言及したい。ソ連では連邦構成共和国のなかで現地民族出身の官僚の赴任が繰り返される傾向があった。アンダーソンの議論を借りると、連邦構成共和国を1つの「巡礼圏」とする官僚たちの「巡礼」が行われたことによって、カザフ共和国なりウズベク共和国なりの政治エリートのあいだで国家観念の基礎が形成され、強化されたと見られる。この点は今までも言われてきたことであって、このパネルのテーマにある「最前線」にはあたらない。しかしソ連と中国とを比較してみるとどうだろう。中国の少数民族自治区では、ソ連の連邦構成共和国に見られたような「巡礼圏」は形成されているのだろうか。報告者の近刊書が明らかにしたところによれば、少数民族自治区をひとつの「巡礼圏」として、そのなかで転勤と昇進を繰り返す少数民族エリートもいるが、上層部で多数派を形成しているのは、全国レベルの「巡礼」を行う漢族エリートである。全国転勤を繰り返す漢族エリートの存在は、一体としての中華人民共和国の共同体概念を醸成し、中華民族主義を不断に強化する方向にある。翻って見れば、ソ連もコア地域と周縁地域の間「巡礼」はそれなりに大きかったのではないだろうか。ソ連が解体したから、上記の点が強調されるということもあろう。ソ連も中国も、20世紀の地続きの「帝国」が旧来の帝国に比べ、交通網が整備され、全国転勤が活発化するの、恐らく時代の趨勢でもあった。これは19世紀以前の「帝国」、本国と植民地が海洋によって隔てられた植民地帝国とのひとつの違いかもしれない。今後は地域の非現地民族、とくにソ連におけるロシア人、中国における漢族の「巡礼」の問題にも着目されよう。

(アジア経済研究所)